

放射線科後期臨床研修プログラム（放射線科）

文責：小林弘子

1. プログラムの目的と特徴

放射線診断学、Interventional Radiology (IVR)、核医学、放射線治療学を勉強する。総合病院であること、第1次～3次救急医療全てを担当していることの利点を生かして、万遍なく習得できるように心掛けている。

2. 取得できる専門医

放射線科診断・治療専門医、日本核医学会専門医、IVR専門医

3. 専門医取得の要件

放射線科専門医：初期臨床研修期間終了後、修練・総合修練機関で3年以上（1年は大学など総合修練機関の研修あるいは研究生となる必要あり）。日本医学放射線学会に入会后3年以上。1次試験に合格して2年後に本試験にて取得。なお、この際は、診断学分野（核医学含めて）と放射線治療分野に分かれての取得となる。

日本核医学会専門医：核医学診療歴を6年以上有し、専門医受験時に日本核医学会に入会していること。

IVR専門医：IVR関連する学会の専門医。学会入会5年以上。2年以上のIVR修練。

4. プログラムの研修内容 【到達目標】

<研修1年目>

CT、MRI、核医学に関し、原理を学習し、読影能力を身に付ける。また、適切な指示や検査が実行できるようになる。IVR部門では危なげない操作技術で、診断アンギオはある程度できるようになる。放射線治療では各種癌疾患に対して基本的な治療体系が把握できるようになる。積極的に学会に参加する。

<研修2年目>

CT、MRI、核医学の読影能力を高める。造影剤の基礎知識、放射性医薬品の半減期、取扱いの実際などに習熟する。IVR部門ではコイル操作などが出来るようになる。放射線治療ではある程度の治療計画が適切に出来るようになる。興味のある症例など積極的に学会で発表する。

<研修3年目>

CT、MRI、核医学では鑑別診断なども数個挙げられるようになっている。稀有な症例に際しても返答に戸惑うことが少なくなっている。被曝や放射線基礎医学も身に付ける。IVRでは、カテーテルやコイルなどに習熟し、その選択ができ、安定した操作技術になっている。放射線治療では定位照射が可能となる。総会発表や論文報告が書けるようになる。自分の方向性、分野を見つける。

5. 指導医・専門医・認定医取得医師名

新野恵司（放射線科治療専門医）、小林弘子（放射線科診断専門医、IVR専門医、核医学専門医および指導医、PET認定医）、為田忠信（放射線科診断専門医および指導医、IVR専門医、核医学専門医および指導医、PET認定医）

6. メッセージ

CTは4台、MRIは1.5テスラが2台、核医学はSPECT装置が1台、リニアック（放射線治療装置）は1台、血管造影装置1台、心臓用血管造影装置2台と設備は充実しており、検査・対象症例も多く、内容も多岐に渡っているので、かなり勉強になる。また、県内では少数のIVR専門施設となっている。当院は診療科数も多く、各科に専門医がいるので相談が容易で診療のしやすさも見逃せないポイント。緊急IVRにも対応している。